

今日の焦点

急速な拡大が続く携帯音楽配信サービス

米アップルコンピュータが2001年11月に発売を開始した「iPod」は、携帯音楽プレーヤーの世界を大きく変えた。iPodはハードディスクやフラッシュメモリを内蔵し、パソコンとの間で高速な音楽データの転送が可能になっている。手持ちのCDなどから音楽を取り込むことができるが、さらにアップルはiTMS（iチューンズ・ミュージックストア）という音楽配信サイトを提供しており、インターネットを使ってこのサイトから聴きたい曲をパソコンにダウンロードし、それをiPodに取り込むことができるようになってきている。iPodの出現によって、ソニーが1979年から累計3億5千万台も販売した「ウォークマン」の牙城を完全に浸食し、MDプレーヤーの売上げをも超えつつある。

出遅れていた国内メーカーも2005年になって巻き返しの動きを本格化した。ソニーはネットワークウォークマンとして携帯デジタル音楽プレーヤーに参入し、松下は記録媒体に着脱式のSDメモリカードを用いてカードを家や車に持ち運んで聴くことができるようになってきている。このほか、日本ビクターやケンウッドも参入しており、徐々にiPod包囲網ができつつある。

米国では、アップルは携帯音楽プレーヤー市場の8割近くを握っており、利用者のほとんどがiPodとセットで使う音楽配信サービスiTMSを活用しており、こうした機器と配信サービスを同時に提供しているアップルが客の囲い込みに成功している。このような状況

から、米国ではiPodに対応した自動車も急増しており、日本のメーカーを含め欧米でiPodの牙城を崩すのは厳しい。

わが国では、もうひとつ携帯電話による音楽配信が急速に伸びている。2002年12月にauが「着うた」として直接携帯電話に音楽をダウンロードするサービスを開始し、2004年11月には1曲まるごと配信する「着うたフル」を開始し、auがシェアを伸ばす原動力となった。現在、携帯電話機で音楽をダウンロードできるサイトは89もあり、auを通じてダウンロードされた曲は6000万曲を超えたとされている。auは本年6月にはソニーと連携して連続30時間再生が可能な携帯音楽プレーヤーに匹敵する携帯電話「ウォークマンケータイ」を発売した。

10月24日からは「番号ポータビリティ」が開始されることもあり、他の携帯電話会社も音楽配信に力を入れ始めた。ソフトバンクモバイル（旧ボーダフォン）は8月に、着うたフル機能を装備した4機種を「ソフトバンクモデル」として投入した。また、自社携帯にiPod機能を搭載した機種の販売も始めている。

NTTドコモは、総合力で勝負するとして、音楽配信には力を入れていなかったが、着うたフルに力を入れ始めた。エイベックスなどレコード会社や音楽配信会社など6社がNTTドコモ向けの音楽配信サービスを開始することを発表し、米ナップスターとタワーレコードの合弁会社「ナップスタージャパン」の音楽配信に対応した新型携帯電話の

発売を急いでいる。

ところで、音楽配信の1曲当りの価格はどうなっているのだろうか。アップルのiTMSは米国では、1曲99セントの一律価格であるが、レコード業界では人気アーティストの新曲が古い楽曲などと同じ99セントというのはおかしいと主張している。わが国では、着うたフルの価格が100円～300円程度であり、アップルも妥協して1曲150円～200円に落ち着いている。音楽配信はここ数年で急速に立ち上がった市場であり、レコード会社、音楽配信会社両業界ともに潜在的不満があり、「適正価格はどれほどか」については、手探り状態であると言える。米国でも価格論争が続いており、わが国も米国の動向を注意深く見守っている。

米国では、ファイル共有ソフト開発の大手グロスターが著作権侵害で音楽・映画業界から訴えられていた裁判で和解が成立し、グ社はソフトの無料配布を停止し、5千万ドルの損害賠償を支払うことで決着した。合法的なネット配信サービスが拡大した結果、こうした音楽などの違法流通に歯止めがかかり、ひと頃は大騒ぎした不正ネット配信問題もようやく落ち着いてきたと言える。

音楽の聴取はこれまでCDやMDが主流であったが、携帯音楽プレーヤーと携帯電話による音楽配信サービスによって大きく様相が変わろうとしている。音楽配信サービスもまだまだ始まったばかりであり、今後どのように展開していくのか極めて興味深い。